

訪問診療で関わりのあるパーキンソン病の患者さんが、このたびユニークな方法でご自身の病と向き合い、発信する取り組みをされました。それは「カルタ」の制作です。多くの人にパーキンソン病について知ってもらい、同じ病気と闘う人々と経験を共有するために作られた当事者発のカルタです。

元々は「この病気のことをまとめたい」という漠然とした考えから始まった試みでしたが、同じ病を持つ患者さん達との出会いを通して

「パーキンソン病」と一括りに言っても、症状の出方は人によって実に様々であることに気付かれたそうです。そこで、自分だけでなく色々な人の症状をまとめてみようと思いつき、たどり着いたのが「楽しみながら学べる参加型」カルタだったのです。

カルタといえば、日本のお正月遊びの定番として子どもの頃に遊んだ記憶のある方が多いと思います。カルタには大きく分けて「いろはカ



## 医界サロン

# 文化装置としてのカルタ

広報委員 安井 博規

カルタ」と「百人一首」の二種類があり、前者は言わば生活の知恵や教訓を遊びながら学べる教材として、江戸時代から広まりました。例えば「犬も歩けば棒に当たる」「情けは人の為ならず」といったことわざも、カルタ遊びを通して自然と言葉が身についたという方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

一方、百人一首の和歌カルタはより文学的で、上の句と下の句を結び付けるといった構造ゆえに、言葉の感覚や古典の理解力を育てる優れた教材でもあります。古典というと難しい、外国語みたいと学生からは敬遠されがちなイメージがあります。かくいう私も学生の頃は古典を敬遠しておりましたが、和歌カルタを授業中に何度かやっているうちに自然と百人一首を覚えた記憶があります（今は忘れてしまったものがほとんどですが…）。こうしたカルタ遊びは、言葉と文化を楽しく学ぶ機会でもあるのです。

近年では、病気や症状をテーマにしたカルタも数多く登場しているようです。例えば「幻聴妄想かるた」「ヘンズツウかるた」「弱視者いろはカルタ」などがあり、いずれも日常生活に大きな困難をもたらす、周囲からは理解されにくいという症状を抱える人々の声を、分かりやすい言葉とイラストで可視化しています。冊子や講義資料とは異なり「遊び」の形を取ることで、誰もが自然と手に取りやすく、記憶にも残りやすい。それこそがカルタの強みです。

カルタは単なる遊びではなく、言葉を通して人と知識、経験と共感をつなぐ「文化の装置」としての力を持っています。その柔らかな力が、病とともに生きる人々の心を支え、社会の理解を少しずつ広げていくのではないのでしょうか。